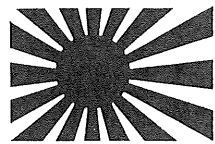
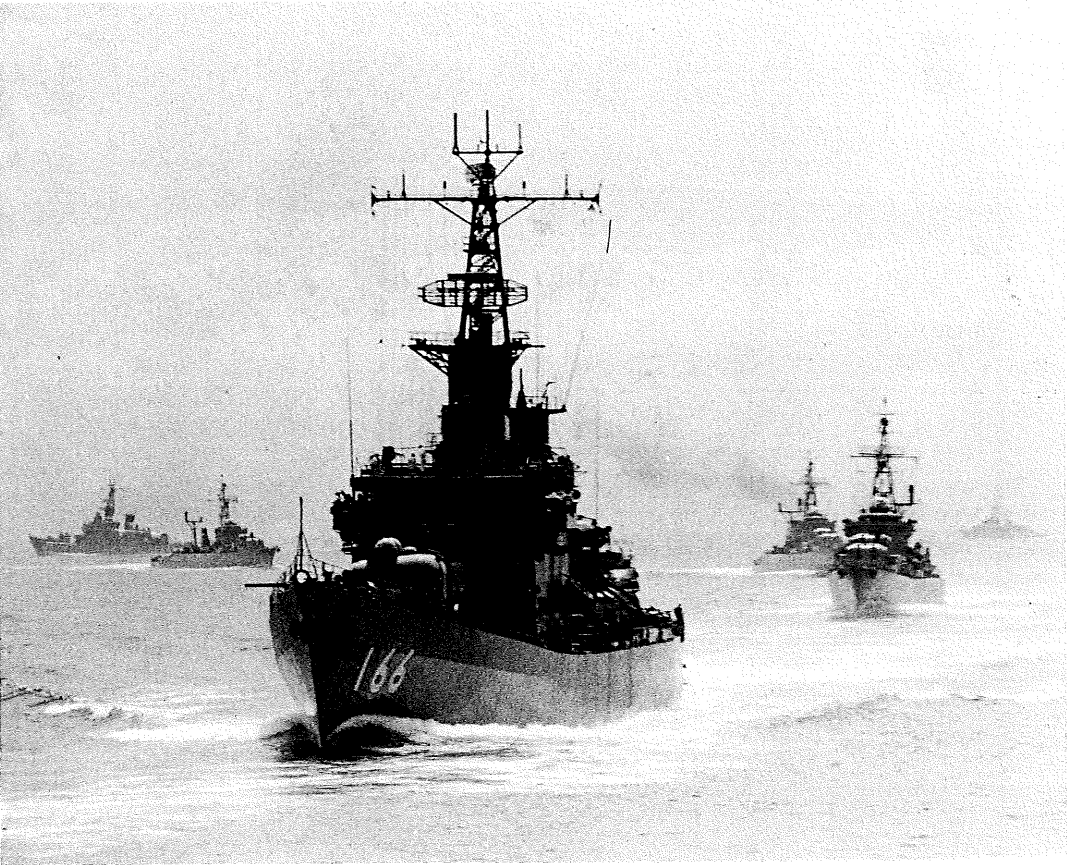


艦船と安全

No. 73



4 1975

特集：護衛艦隊

◆特集：護衛艦隊*****

道東周航記

—— 平 間 洋 ——

積雪50センチ、スカッパのつらら1メートルという厳しい自然に耐え、北方の防人を任じている35護衛隊ではあるが、佐伯には行けても北海道へはなかなか行けないものである。しかし、幸い昨年9月、個艦訓練を利用し長年の夢が実現した。

はじめは司令も乗艦されるとのことで気易く考えていたが、都合で行かれなくなり新米艦長の一人旅となったから大騒ぎ。司令には「高い油を使って行くのだ、行くからには成果を上げろよ。どこへ寄ろうと何をしようと艦長の自由だ。思う存分やっ来て」と一任されて、かえって責任を痛感。鶴首協議の結果、戦技第一の猛訓練論もあったが、Sea Power を説き、Show the Flag の意義を押しつけ、本行動の重視事項、目的を次のとおり決めた。

- 1 国内外に対する Show the Flag
- 2 北方海域に対する慣海性の向上
- 3 乗員に対する北方領土の認識
- 4 陸空自衛隊との相互理解・親睦の増進
- 5 地連募集業務の支援

最初は Show the Flag の観点から「外交力としての艦艇の価値用法」と Sea Power の教科書に書いてあるとおり、わが国が固有領土と主

張しているクナシリ、エトロフ両島を周航し、わが外交政策を側面から支援しようかとも考えた。しかし、小官の頭脳では理解不可解な議論が横行しているわが国の政治情勢を考え、「つまらぬことをした」と国会で問題にされ「位人臣を極めた」と感激している艦長のポストを棒に振ってはと思直して断念した。

その代り国内へは自衛艦の寄港をできるだけ PR し、Show the Flag の成果を上げようと考えたが、新聞等で派手に宣伝し反対デモまで盛り上がった。これまた大変だ。そこで気がついたのが前々日のニュースが昼頃にしか配達されず夕刊もない大湊の新聞特性。調べてみたら北海道も地方版は2日後にしか記事が載らないとか。

Show the Flag は企図の秘匿と入港後の派手な PR と決定、入港日時等も関係官庁及び友好団体のみに止めるよう地連に連絡、企図の秘匿につとめた。この外士官室では事前準備として各種のケースに対する対処要領、例えば

- 外国艦艇に追しようされた場合、針路を妨害された場合
- デモ隊が来た場合、過激派の爆発物に対する警戒要領
- 一般見学者への過激派の潜入対策、見学者が怪我をしたら、海に落ちたら etc.

等の事案に対し、デモ隊が来たら「傍観するだけでなく積極的に艦内マイクで「乙女の祈り」や「トロイメライ」を流せ、それでも帰らなければハンデビリーポンプでも起動し甲板掃除でもやるか」とケンケンガクガクの議論の末、各種対策が研究された。



いざ艦長として出掛けるとなると、いろいろと気になることのみ多く、得意の機雷掃海や夜間の水路見学まで考える余裕はなかった。是非、もう一年続けてやらせていただくよう本誌紙面を借り関係各位に伏してお願致します。さて、出発前に乗員に本行動の意義を徹底しようと北方領土関係の資料を根室市に依頼したところ、市長から多数の資料が速達で送られてきた。

早速これら資料をもとに北方領土の重要性・歴史的事実・価値等を説くとともに千島列島と海軍の関係、すなわち千島列島の領有を強く主張しカッターで品川を乗り出し凍傷に悩みながら越冬した群司大尉や白瀬中尉（南極探検の方が有名）、3等駆逐艦による北洋漁業保護の苦心談、終戦以来1,424隻（12,008名）が捕され525隻（20名）が未帰還であるソ連による日本漁船の捕状況等を説明し、北方領土、オホーツク海に対する認識と先人の労苦を話した。

目的を理解し、士気も高まり、さて最初の寄港地「稚内」に着いて驚いた。係留予定のブイ至近距離に停泊船2隻、気笛を鳴らせど発光を送れど人影なし、あきらめて港外に出る。待つこと一時間、やっと退いてくれたが、わが初航海のなんと滑り出しの悪いことよ。しかし「今年は駆潜艇や掃海艇しか来ず、こんな大型最新鋭艦（艦隊の人は笑うかも知れないが）の来訪は初めてです」などと言われ気嫌を直した次第。市長、警察署長等を表敬、艦上昼食会を行なったが田舎艦隊、Salvage Navyの悲しさ、Show boat Navyの練習艦隊とは異なり食器もなければホークもなし、味付け盛り付けはすべて大湊農協風、それでもおいしい、おいしいと食べてもらえた。一方、乗員は分遣隊の好意により宗谷岬の見学、乗員父兄や防衛協会からタラバガニやタバコを贈られる等の暖かい好意を受け、短い寄港ではあったが楽しい一日を過ごした。

稚内を出ずればいよいよオホーツク海、緊張し待ったが御出迎へもなし、せっかく国際法や米ソ海上衝突防止協定まで調べたのに。翌日は刑務所で有名な網走着、「あそこは反対運動がすごいですよ」と驚かされ、「上陸は私服にするか制服に

するか」でもめたところ。念入りに見渡したが赤旗もなければ人影もなし。早速、第1種夏礼装に着換えて市長等への表敬訪問と新聞社への連絡を開始。表敬先では「年1回は少な過ぎる。去年は1隻も来なかったがオホーツク海は日本の海ですよ」と激励され、市長から同市の民芸品ニボガ人形が贈られる等出だしは好調。

一方、「艦内見学と食事を用意しました」と網走の全新聞社（たった5社）を誘ったところ好奇心からか、北海道開発庁長官が同市を訪問中であつたにもかかわらず、全社出席との返事に会食者は倍増、俺までは食えると張切っていた補給長以下の本艦幹部はゴウジャスな昼食を横目に私室でプレート配食となつてしまった。夕刻、記者に誘われ夕食を御馳走になっていたらある人から電話あり。「水兵を町で見掛けるが自衛艦が入つたのか」記者いわく、「今朝入港した。艦長さんも今ここにおられる。ところでお前デモやるんか」答えていわく、「動員を掛けるにはブラカードやビラを作る等2日はかかる。今回は突然の入港なので止めた」と。わが作戦は完全に成功、デモもなければビラもなし、出港翌日の新聞（朝日・毎日・読売・北海道タイムス・網走日報）には大きく報道された。

翌日は陸上自衛隊第5特科連隊の大隊長清水2佐（防大1期）を先頭に同隊々員75名が来艦、艦内見学や懇談会、最後に記念品の交換をやつたが、防大時代陸海の問題児であっても部下の手前お互いにほめ合つてエリート同志ということにな



網走市長及び陸上自衛隊第5特科連隊から贈られたニボガ人形（筆者提供）

つてしまった。そして、真実を知らぬ3大隊の隊員と「ちとせ」乗員は将来の陸・海幕僚長？の劇的握手に感激したのであつた。一方、乗員は2日にわかれて摩周湖方面をバス旅行、初日は快晴、翌日は霧でまったくの霧中航行だったとか。

一般公開は波も高く困難はあつたが、服が濡れても異議を言わぬことを条件に168名を輸送、途中大波をかぶり、びしょ濡れになった人もいたが、濡れた人には作業服を貸し服は直ちに乾燥機で乾かす本艦のスマートな、また暖かいムードに感銘の態。しかし、本艦の好意を受けたのは残念ながら男性ばかりであつた、念のため。

帰途はぐつとくたけてバスの中で覚えさせられた「知床旅情」やアイヌ民謡「ビリカピリカ」の隊歌演習、機関士が声を張り上げる割には一向に

盛り上がりせず、歌声は小さく波間に消えた。それはそうだろうメロディーがメロディーだもん。しかし、本艦乗員はこの歌とともにいつまでも本行動を懐かしく想い起こすことであろう。一方、艦長殿は北方領土の重要性を主張し品川からカッターで千島に渡つた明治の群司大尉の勇氣と意気に比べ、2佐にもなり冷暖房完備の最新鋭艦に乗りながら、網走から反転せざるを得なかつた自己の無力と昭和元禄の時代風潮をにがにがしく思いながら、次の一句をものにして鬱憤を晴らしたのであつた。

「さい果ての、岬に立ちて想うのは、
奪い取られし、北の島々」
（ちとせ艦長 2佐）

◆特集：護衛艦隊